

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32692

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H02715

研究課題名(和文) 祭りの支度を通じた共同体 心体知 の集団学習メカニズムの解明

研究課題名(英文) The elucidation of the group learning mechanism of community-specific 'ethos,' 'coordinated body skills,' and 'common knowledge'

研究代表者

榎本 美香 (ENOMOTO, Mika)

東京工科大学・メディア学部・講師

研究者番号：10454141

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円

研究成果の概要(和文)：祭りの支度を通じて以下に示す共同体固有の 心体知 を後継者世代が仲間内や現役世代と多対多の相互作用から集団学習するメカニズムを解明した。(1)心：成員たちがもつ価値観や見識、信頼感といったエートス(e.g. 他者への気配り、自己犠牲の精神)(2)体：成員間で力や身体位置の配分が必要な協働活動技法(e.g. 唄のリズムと木や縄の操作との同調)(3)知：祭具の名称や用法、祭りのしきたりといった共有知識(e.g. 社各部位の木材や縄結びの呼称)

共同体 心体知 を学習する成員たち自身のやり方を相互行為分析から炙り出し、その学習のメカニズムを解明した。

研究成果の概要(英文)：We clarified the leaning mechanism of the community-specific 'ethos,' 'coordinated body skills,' and 'common knowledge,' which are inherited from generation to generation through the preparatory works for a traditional festival. i) 'Ethos': values, insight, and confidence that the members of the community have (e.g., consideration for others and the spirits of self-sacrifice); ii) 'Coordinated body skills': collaborative techniques required for controlling the force and the placement of the bodies among the members (e.g., synchronization between the rhythm of singing and the operation on trees and ropes); and iii) 'Knowledge': common knowledge about the usage of festival equipments and traditional conventions (e.g., the names of parts of woods and of rope knitting).

We analyzed how the members of the community learn these 'ethos,' 'coordinated body skills,' and 'common knowledge' through detailed video analysis, and revealed the model of the group learning.

研究分野：認知科学、心理学、コーパス言語学

キーワード：心体知 相互作用 学習 エートス 共同活動技法 共有知識 祭り 共同体

1. 研究開始当初の背景

従来研究では、熟達者個人がもつ知識や技術、実践のエッセンスを初心者個人がどう引き継ぐかという個人「内」の学習の域を出ない研究しかなかった。これらは、熟達者と初心者、1対1の学習モデルとなっている。

これに対し、本研究で扱うのは熟達者たちが共有している知識や技術や習性であり、個人「間」の相互作用の中に立ち現れる概念である。従って、熟達者たちと初心者たちという多対多の学習をターゲットとし、初心者が教え導かれるだけでなく、仲間うちでの相互作用からも共同体〈心体知〉を獲得・共有・強化していくという学習モデルの構築に研究の途を進めるものであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、祭りの支度を共に行うことで、以下に示す共同体固有の〈心体知〉を後継者世代が仲間内や現役世代と多対多の相互作用から集団学習するメカニズムを解明することである。

心: 成員たちがもつ価値観や見識、信頼感といったエートス(e.g. 他者への気配り、自己犠牲の精神)

体: 成員間で力や身体位置の配分が必要な協働活動技法(e.g. 唄のリズムと木や縄の操作との同調)

知: 祭具の名称や用法、祭りのしきたりといった共有知識(e.g. 社各部位の木材や縄結びの呼称)

共同体〈心体知〉は個々人が持つ知識・技法・

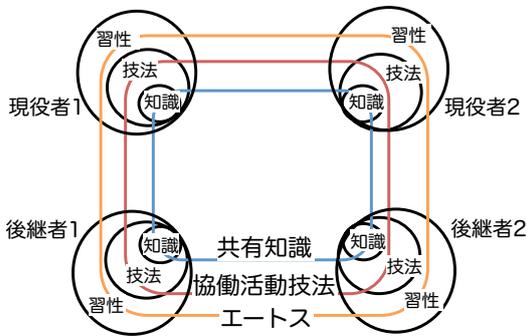


図1 共同体〈心体知〉モデル

習性のうち、他の成員と共有する部分を指し(図1)、世代内・世代間の相互作用の中で初めて学習可能になる。本研究では、共同体〈心体知〉を学習する(1)成員たち自身のやり方を相互行為分析から炙り出し、(2)背後にある認知メカニズムを解明する。

3. 研究の方法

(1) 祭りの支度の経年的データの収録と整備

① データ収録

■収録場所：長野県下高井郡野沢温泉村

■対象：(i)野沢温泉で1月に行われる道祖神祭りの支度を担う「三夜講」という数え42歳につらなる3世代の集団の相互作用を収録対象とする。1三夜講内では、毎年42歳30名

弱の集団が祭りの中心的な執行を担う「世話人」(現役集団)となり、それより年下の41歳、40歳の集団は「見習い」(後継者集団)として世話人を手伝う。(ii)野沢温泉の湯澤神社祭礼(9月)の獅子舞・猿田彦の舞集団(30歳前後)を対象とする。現役世代8名、後見者世代数名から編成される。

② データ整備

■同期映像の作成：複数台のカメラで同一場面を撮影した映像を同期信号(撮影時に挿入した手拍子)をもとに、同一時間軸に併置した合成画面を作成する。

(2) 共同体〈心体知〉学習の相互行為分析

① 〈知〉の学習：祭具の名称や用法などの共有知識が形成されていく過程を定式化

言葉・絵図・写真などで記号化される知識を対象とする。木は使用用途に応じて、桁・ダキ桁・井桁・垂木等といった名称がつく。木の運搬や養生、社殿造営に使われる縄結びにも部位や目的に応じて、箱結び・本結び・丸太結び・トックリといった結び方と名称がある。祭具として利用される提灯等にも制札灯籠、榊灯籠、猿田御幣灯籠といった名称と形がある。

② 〈体〉の学習：他者との同調が必要な協働活動技法が体得されていく過程を定式化

掛け声や唄や囃子にあわせて、複数人が同時に対象へ働きかける協働活動を対象とする。「せーの」「よいしょ」という掛け声や合いの手に併せた木の運搬・操作、胴突唄に合わせた御神木立て、笛や太鼓の奏者と2~6名で舞われる獅子舞など、数十名がリズムカルに力や身体を配分する必要がある。

③ 〈心〉の学習：物事や人を意味づけるエートスが組成されていく過程を定式化

言動の端々に含みとして表れる物事や人に対する価値観、心得、信頼感などを対象とする。木の運搬の為に一斉に木に近づく時他者の進路を遮らないようにする、協働相手が必要としている道具をそっと渡すといった他者配慮やきつい作業を自ら率先して行うという自己犠牲の精神が随所にみられる。そして、3年間互いを思いやりながら祭りの支度に携わることは相互信頼感を形成する。

(3) 共同体〈心体知〉学習メカニズムのモデル化

〈知〉〈体〉〈心〉学習個々の研究成果を統合した〈心体知〉学習メカニズムをモデル化する。

4. 研究成果

(1) 祭りの支度の経年的データの収録と整備

収録・整備を行った祭りの行事と年度を表1, 2に示す。

(2) 共同体〈心体知〉学習の相互行為分析

① 〈知〉の学習：

縄の編み方・結び方や道具の名称など祭りに特有の知識が活動と結びついて獲得・共有される方法をみた。縄編みの場面に焦点を当て、教えるものと学ぶものの手の動きを観察

表 1 道祖神祭りの主な収録内容

| 行事名 | 時期 | 既収録年度 |
|--------|-------|-------------------------|
| シート洗い | 6月中旬 | H26, 27, 28, 29 |
| 御神体伐採 | 7月上旬 | H26, 27, 28, 29 |
| ぼや出し | 9月下旬 | H25, 26, 27, 28 |
| 御神木伐採 | 10月中旬 | H24, 25, 26, 27, 28, 29 |
| 御神木里曳き | 1月13日 | H25, 26, 27, 28, 29 |
| 社殿組み | 1月14日 | H25, 26, 27, 28, 29 |
| 道祖神祭り | 1月15日 | H25, 26, 27, 28, 29 |

表 2 湯澤神社例祭の主な収録内容

| 行事名 | 時期 | 既収録年度 |
|--------|------|---------------------|
| 神楽の稽古 | 8月中 | H26, 27, 28, 29 |
| 稽古まるめ | 9月6日 | H26, 27, 28, 29 |
| 最終準備作業 | 9月7日 | H26, 27, 28, 29 |
| 祭礼本番 | 9月8日 | H25, 26, 27, 28, 29 |
| 神輿巡業 | 9月9日 | H25, 26, 27, 28, 29 |

する。それまで動いていた学ぶものの手が一旦止まるという情報は、「何かを教えるタイミングである」という事実を、教えるものと学ぶものとの間に顕在化させていた。発話による質問と同時に手の動きを緩めると、教え手はその緩んだ手に自身の手を添わせて局所的に編み方を伝授するという方法が取られていた。

② 〈体〉の学習：

多人数で重たいものを持ち上げたりするために重要なリズム取りの役割を果たしているのは唄であった。御神木を設置する際には、まず雪上に掘られた穴に御神木を仮に立てたあと、これを雪中深く突きさす「胴突」が

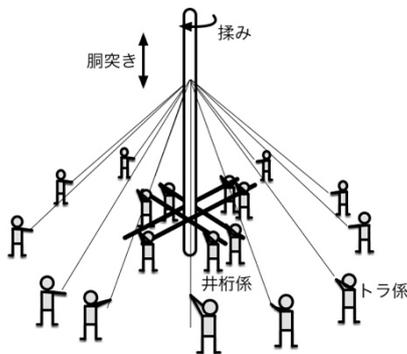


図 2 胴突唄と井桁係・トラ係

行われる。胴突では、木に井の字型に固定された桁木に取りつく「井桁」係と、木のなかほどに結わえられたトラ（ロープ）に取りつく「トラ」係の二役に分かれて共同作業を行う（図2）。井桁係がいっせいに井桁を持ちあげると、御神木は一瞬、少し浮き、その頂点でトラ係がタイミングを合わせていっせ

いに周囲からトラを引くと、御神木は雪中深くめりこむ。この複雑な共同作業のタイミングを調節しているのが「胴突唄」であった。歌の微細な構造は、あたかも会話において発話が次の発話のタイミングを「投射」するように、動作のタイミングを予告し、共同作業に関わっていた。

③ 〈心〉の学習：

百名近くの人が同時並行的に作業を進めるためには、各人が臨機応変にその場で必要な作業を見出すことが必要である。今日の前にある活動の中から自ら手を出す箇所を発見し、躊躇なく動き出せる力が三夜講を通じて経時的に獲得されていくことを明らかにした。彼らの中には、その場において必要性に気づいたならただちに手助けすべきという価値観が植え付けられていき、これが三夜講の年数を経るごとに全員に浸透していくのである。ブルーシートの端を上げたり雪ならしを手伝うなど一見何気ない共同活動である〈体〉が、目の前の出来事から問題を検出したなら速やかに行動に移ることという〈心〉に根ざしていることが見て取れた。

(3) 共同体〈心体知〉学習メカニズムのモデル化

〈知〉と〈体〉は相互に不可分であり、ある活動を行うなかでどちらも学習される。さらに、その背後に〈心〉があり、いくつもの活動を通じて〈知〉〈体〉を得る中で、意識的・無意識的に取得・強化されていく。反対に、〈心〉が体得されたなら、それに基づく〈体〉が自ずから実践され、たとえ未経験の活動も作法通りに行えるようになる。これらを図3のようにモデル化した。

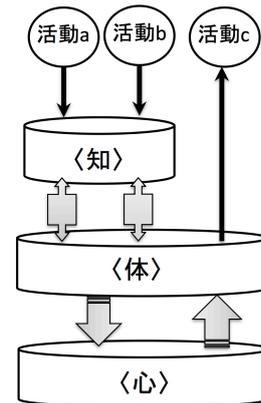


図 3 〈心体知〉学習モデル

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 16 件)

- ① 榎本美香・坊農真弓・細馬宏通・伝康晴・高梨克也・寺岡丈博・阿部廣二・坂井田瑠衣、第40回研究大会ワークショップ祭りの伝承にみられる共同体〈心体知〉、査読無、社会言語科学、Vol. 20, No. 2, 2018, pp. 52—62
- ② 坊農真弓、手話相互行為における即興手

- 話表現:修復の連鎖の観点から、査読有、社会言語科学、Vol.19, No.2, 2017, pp.20-31
- ③ 坊農真弓 他、会話における“収録される”ことのも様な利用、査読有、質的心理学研究、Vol.16, No.2, 2017, pp.25-454
- ④ 高梨克也、多職種チームにおける協働のための工夫と困難-日本科学未来館展示制作チームのフィールド調査から、査読無、質的心理学フォーラム、Vol.9, 2017, pp.43-53
- ⑤ 細馬宏通、身体コミュニケーションに埋め込まれている「知」:認知症高齢者の食事介助を例に、査読無、月刊保団連、Vol.1240、2017、pp.25-30
- ⑥ 榎本美香、話者交替、査読無、日本語学、Vol.4、No.36-4、2017、pp.60-69
- ⑦ 諏訪正樹・坂井田瑠衣・伝康晴、間合いと身体知、査読無、人工知能学会誌、Vol.32, No.2, 2017, pp.255-262
- ⑧ 高梨克也 他、模擬遠隔聴診におけるコミュニケーション分析の試み、査読有、医療情報学、Vol.35, No.6, 2016, pp.297-304
- ⑨ 細馬宏通、他者の視点を得るための身体動作:認知症対応型共同生活介護施設(グループホーム)における介護者による過去に対する記述、査読無、人間文化、Vol.41、2016、pp.2-7
- ⑩ 伝康晴 他、均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する基礎調査、査読有、国立国語研究所論集、Vol.10, 2016, pp.85-106
- ⑪ 榎本美香・伝康晴、フィールドに出た言語行為論:「指令」の事前条件達成における相互行為性・同時並行性・状況依存性、査読有、認知科学、Vol.22, No.2, 2015, pp.254-267
- ⑫ 坊農真弓 他、相互行為としての手話通訳活動:手話通訳者を介した聞き手獲得手続きの分析、査読有、認知科学、Vol.22, No.1, 2015, pp.167-180
- ⑬ 坊農真弓 他、フィールドにおける語り分析のための身体の空間陣形:科学コミュニケーターの展示物解説行動における立ち位置の分析、査読有、認知科学、Vol.22, No.1, 2015, pp.53-68
- ⑭ 城綾実・坊農真弓・高梨克也、科学館における「対話」の構築:相互行為分析から見た「知ってる?」の使用、査読有、認知科学、Vol.22, No.1, 2015, pp.69-83
- ⑮ 坊農真弓、ロボットは井戸端会議に入れるか:日常会話の演劇的創作場面におけるフィールドワーク、査読有、認知科学、Vol.22, No.1, 2015, pp.9-22
- ⑯ 平本毅・高梨克也、環境を作り出す身振り:科学館新規展示物制作チームの活動の事例から、査読有、認知科学、Vol.22, No.4, 2015, pp.557-572

[学会発表] (計 41 件)

- ① Mika Enomoto & Katsuya Takashi, “Some usages of the Japanese spatial-temporal deixis ‘KORE’ and ‘SORE’ embedded in collaborative activities: Case studies from the preparing works for Dosojn festival in Nozawa-Onsen,” 査読有, The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8), 2018
- ② Mayumi Bono, “How do deafblind people share their stance?: A comparative analysis of expressing laughter in tactile Japanese sign language and finger braille interactions,” 査読有, The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8), 2018
- ③ Rui Sakaida & Mayumi Bono, “When nonverbal behavior is interpreted: Strong orientation toward embodiment in finger braille interpretation,” 査読有, The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8), 2018
- ④ 榎本美香・坊農真弓・細馬宏通・伝康晴・高梨克也・寺岡 丈博・阿部廣二・坂井田瑠衣、ワークショップ 祭りの伝承にみられる共同体〈心体知〉、査読有、社会言語科学会第40回大会発表論文集、2017、pp.262-270
- ⑤ 榎本美香・高梨克也、協働活動に埋め込まれた現場指示の「これ」と「それ」の用法～北信州野沢温泉に伝わる道祖神祭りの準備作業場面より～、査読有、日本認知科学会第34回大会論文集、2017、pp.185-192
- ⑥ 寺岡丈博・伝康晴・榎本美香、猿田彦の舞における拍子方の相互行為分析:野沢温泉湯澤神社例祭の事例から、査読有、日本認知科学会第34回大会論文集、2017、pp.586-593
- ⑦ 伝康晴、広大な野外における会話時の身体の空間配置:野沢温泉道祖神祭りの準備作業における事例から、査読有、日本認知科学会第34回大会論文集、2017、pp.171-179
- ⑧ 細馬宏通、共同作業における指揮者の掛け声と身体動作-野沢温泉村道祖神祭りの里引きの事例から-、査読有、日本認知科学会第34回大会論文集、2017、pp.258-259
- ⑨ 高梨克也、協働作業において相手の環境との関わり方を観察する-野沢温泉村道祖神祭りの準備における氷点下の木遣りの事例から-、査読有、日本認知科学会第34回大会論文集、2017、pp.573-580
- ⑩ 坂井田瑠衣・伝康晴、会話場の再編を司る身体配置・関与配分・成員性:野沢温泉道祖神祭りの準備作業場面から、査読無、人工知能学会研究会資料、Vol. SIG-SLUD-

- B507-04, 2017, pp.1—6
- ⑪ Yasuhiro Katagiri, Katsuya Takanashi, Masato Ishizaki, Mika Enomoto & Yasuharu Den, “Concern=Alignment for Negotiation and Joint Inquiry in Dialogues,” 査読有, SemDial 2017: Proceedings of the 21st Workshop on the Semantics and Pragmatics of Dialogue
- ⑫ Yuichi Ishimoto, Takehiro Teraoka, & Mika Enomoto, “End-of-Utterance Prediction by Prosodic Features and Phrase-Dependency Structure in Spontaneous Japanese Speech,” 査読有, INTERSPEECH 2017, pp.1681-1685
- ⑬ 榎本美香・伝康晴・高梨克也・片桐恭弘、クライアントの提案への評価の先触れとなるコンサルタントの聞き手行動、査読無、人工知能学会研究会資料、Vol. SIG-SLUD-B507-04, 2017, pp. 22—27
- ⑭ Mayumi Bono etc., “Preliminary Analysis of Embodied Interactions between Science Communicators and Visitors Based on a Multimodal Corpus of Japanese Conversations in a Science Museum,” 査読有, The 15th International Pragmatics Conference (15th IPRA), 2017, pp. 4036—4043
- ⑮ 坊農真弓、手と身体と会話のことば学、査読無、情報処理学会 第 80 回全国大会, 2017
- ⑯ 伝康晴、身体的教示場面における言語使用:アドレス性について考える、査読無、第 5 回動的語用論研究会, 2017
- ⑰ 高梨克也、環境の中での他者の身体動作に現れた志向の観察者にとっての利用可能性、査読無、2017 年第 1 回からだと発達研究会, 2017
- ⑱ Yasuharu Den etc., “A large-scale corpus of everyday Japanese conversation: Methodology for recording naturally occurring conversations,” 査読有, Proceedings of LREC 2016 Workshop: Just talking – Casual talk among humans and machines, 2016, pp.9—12
- ⑲ Katsuya Takanashi etc., “Annotation and analysis of listener’s engagement based on multi-modal behaviors,” 査読有, Proceedings of ICMI Workshop on Multimodal Analyses enabling Artificial Agents in Human-Machine Interaction (MA3HMI), 2016, pp.1—6
- ⑳ Katsuya Takanashi etc., “Prediction of ice-breaking between participants using prosodic features in the first meeting dialogue,” 査読有, Proceedings of ICMI Workshop on Advancements in Social Signal Processing for Multimodal Interaction (ASSP4MI), 2016, pp.1—5
- ㉑ 榎本美香・伝康晴、飛び入りで協働活動に参加する～野沢温泉道祖神祭り三年間の事例より～、査読有、日本認知科学会第 33 回大会論文集、2016、pp. 213—220
- ㉒ 寺岡丈博・伝康晴・榎本美香・猿田彦の舞における舞方と奏方の即興的調整:野沢温泉燈籠祭りの事例から、査読有、日本認知科学会第 33 回大会論文集、2016、pp. 207—212
- ㉓ 伝康晴、身体的インタラクションを提示して教授する:柔術の技術指導場面から、査読有、日本認知科学会第 33 回大会論文集、2016、pp. 201—206
- ㉔ Yuichi Ishimoto & Mika Enomoto, “Experimental Investigation of End-of-utterance Perception by Final Lowering in Spontaneous Japanese,” 査読有、Oriental COCODA 2016, pp. 205—209
- ㉕ Yuichi Ishimoto, Takehiro Teraoka & Mika Enomoto, “A study on prediction of end-of-utterance by prosodic features and phrase-dependency structure in spontaneous speech,” 査読有, 5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and the Acoustical Society of Japan, 2016
- ㉖ 伝康晴、コーパス言語学的手法による音声対話の分析:認知・相互行為背反の観点から、査読無、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS&VNV) 2016 年 8 月合同研究会, 2016
- ㉗ 細馬宏通、自己観を開く:個の認知から相互行為による認知へ、査読無、表象文化論学会シンポジウム, 2016
- ㉘ Hiromichi Hosoma, “Extended gestures to manage the rule of the game interactively,” 査読有, International Society of Gesture Studies, 2016
- ㉙ 細馬宏通、共同作業における歌の時間構造 — 野沢温泉道祖神祭りの洞突歌 —、査読無、質的心理学会大会, 2016
- ㉚ 高梨克也、「他者の認知の利用」に関する生態学的考察、査読有、日本認知科学会第 33 回大会論文集、2016、pp. 244—251
- ㉛ 高梨克也、他者の発話を理解することの生態学的価値を考慮した発話理解モデルの提案、査読有、第 19 回日本語用論学会年次大会, 2016
- ㉜ 榎本美香・伝康晴、目の前の活動に「手を出す」力を育む～野沢温泉道祖神祭りに携わる「三夜講」の経時的変化の分析 ～、査読無、人工知能学会研究会資料、Vol. SIG-SLUD-B503, 2016, pp. 30—35
- ㉝ 高梨克也・坊農真弓 他、対話・言語コミュニケーションにおける主観性とその評価、査読無、2016、言語処理学会第 22 回年次大会
- ㉞ 坊農真弓 他、参加者の理解に基づく身体

動作のアノテーション手法の提案、査読無、人工知能学会研究会資料、Vol. SIG-SLUD-B503, 2016, pp. 7-12

- ③⑤ Yasuhiro Katagiri & Katsuya Takanashi, "Concern-alignment analysis of consultation dialogues," 査読有, Proceedings of the 19th Workshop on the Semantics and Pragmatics of Dialogue (SEMDIAL 2015), 2015, pp. 184-185
- ③⑥ 高梨克也, 対話における発話意図の認定をめぐる問題-話し手が「伝える」と聞き手に「伝わる」と、査読無、日本音響学会誌、Vol. 71, No. 9, 2015, pp. 468-475
- ③⑦ 榎本美香, 共同体〈心体知〉を伝える世代間協働インタラクションの分析、査読無、電子情報通信学会第3種研究会ヴァーバル・ノンヴァーバルコミュニケーション研究会 第49回 VNV 研究会「フィールドに挑む!〜野沢温泉村 道祖神祭りの地にて」、2015
- ③⑧ 榎本美香・伝康晴, 共同体〈心体知〉の経年的変化に関する分析〜相互行為データと当事者の内省的叙述を手がかりに〜、査読有、日本認知科学会第32回大会論文集、2015, pp. 1010-1019
- ③⑨ 伝康晴 他, 「フィールドに出た認知科学」の必要性、査読有、日本認知科学会第32回大会論文集、2015, pp. 991-995
- ④⑩ Hironichi Hosoma etc., "How the festival oat realized the emergence of the interaction at the edge of a traditional Japanese festival," 査読有, IIEEMCA 2015 (The International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis), 2015
- ④⑪ 細馬宏通, 洞突唄の音韻構造と協同作業、査読無、電子情報通信学会第3種研究会ヴァーバル・ノンヴァーバルコミュニケーション研究会 第49回 VNV 研究会「フィールドに挑む!〜野沢温泉村 道祖神祭りの地にて」、2015

[図書] (計 13 件)

- ① 坊農真弓 他, 共在相互行為における空間取りと方向付け、山崎敬一(編)『EMCA ハンドブック』、新曜社、印刷中
- ② 榎本美香 他, メディア学キーワードブック-こんなに広いメディアの世界、コロナ社、2018、197
- ③ 細馬宏通, 二つの「この世界の片隅に」、青土社、2017、253
- ④ 坊農真弓 他, 「多人数インタラクション」人工知能学会編『人工知能学大事典』、共立出版、2017、1579
- ⑤ 高梨克也, 展示制作活動における参与・関与の変化から見た参与者の志向の多層性、コミュニケーションを枠づける-参与・関与の不均衡と多様性(片岡邦好・池田佳子・秦かおり(編)), くろしお出版、2017、pp. 199-219

- ⑥ 高梨克也 他, 「社会的コンテクスト」の記述とデザイン:組織的ワークを支援するソフトウェア開発を事例に、ワークプレイス・スタディーズ:はたらくことのエスノメソドロ ジー(水川喜文・秋谷直矩・五十嵐素子(編)), ハーベスト社、2017、pp. 278-296
- ⑦ 高梨克也, インタラクション分析に基づく科学コミュニケーションのり・デザイン、市民参加の話し合いを考える(村田和代(編)), ひつじ書房、2017, pp. 51-73
- ⑧ 細馬宏通, 介護するからだ、医学書院、2016、279
- ⑨ 高梨克也, 基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法、ナカニシヤ出版、2016、161
- ⑩ 細馬宏通 他, 世代をつなぐ竜王の祭り(「祭りのしきたりはいかに更新されるか- 田中集落囃子方の実践 -」)、サンライズ出版、2016、229
- ⑪ 坊農真弓 他, 雑談の美学、ひつじ書房、2016、344
- ⑫ 高梨克也・坊農真弓 他, 動物と出会う II 「心と社会の生成」、木村大治(編)ナカニシヤ出版、2015、200
- ⑬ 高梨克也 他, 子育ての会話分析、高田明・嶋田容子・川島理恵(編)、昭和堂、2015、264

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榎本美香 (ENOMOTO, Mika)
東京工科大学・メディア学部・講師
研究者番号: 10454141

(2) 研究分担者

伝 康晴 (DEN, Yasuharu)
千葉大学・大学院人科学研究院・教授
研究者番号: 70291458

細馬宏通 (HOSOMA, Hironichi)
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号: 90275181

坊農真弓 (BONO, Mayumi)
国立情報学研究所・コンテンツ科学研究系・准教授
研究者番号: 50418521

寺岡丈博 (TERAOKA, Takehiro)
東京工科大学・メディア学部・助教
研究者番号: 30617329

(3) 連携研究者

高梨克也 (TAKANASHI, Katsuya)
京都大学・情報学研究科・研究員
研究者番号: 30423049